

平成21年 5月22日現在

研究種目：基盤研究（C）	
研究期間：2005～2008	
課題番号：17520075	
研究課題名（和文）	中世修道院建築の参事会室・修道女席における絵画画像の研究
研究課題名（英文）	Iconography of Chapter House and Nuns' Choir in Medieval Monastic Architecture
研究代表者	谷古宇 尚（YAKOU HISASHI） 北海道大学・大学院文学研究科・准教授 研究者番号：60322872

研究成果の概要：おもに13世紀から14世紀にかけてのゴシック期のフランシスコ会修道院の建築と絵画を取り上げて、これまであまり研究の対象とされなかった修道院参事会室や修道女席、また回廊などに描かれる絵画画像について、建築的文脈や当時の宗教的・政治的状況を考慮に入れながら考察した。特にナポリのサンタ・マリア・ドンナレジーナ修道院とサンタ・キアラ修道院、シエナのサン・フランチェスコ聖堂については、全般的な調査に基づき、絵画の図像的な意味と建築の役割を明らかにすることができた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総計	3,500,000	540,000	4,040,000

研究分野：芸術諸学，美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：女子修道院，集會室，ナポリ，シエナ，フランシスコ会，終末論，宣教，殉教

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の最大の特色は、建築と絵画を相関するものとして捉え、両者を複合的に考察しようとする点にある。またその際、享受者の信仰実践（黙想、祈り、ミサ・典礼への参加など）を念頭に置く。こうした方法をとることにより、絵画画像をより適切に解釈することが期待されるが、これまでは絵画が単

独で、コンテキストへの十分な配慮がないままに取り扱われることが多かった。さらに絵画との関連において、建築類型や建築部位の持ちうる意味について、新たに問題提起ができると考えられる。

(2) フランシスコ会建築の研究において、聖堂部分に関する考察は一般に充実しているが、回廊や参事会室などそれ以外の部分に言及されることは非常に少ない。本研究はそ

の欠を補うものである。

またフランシスコ会系の女子修道会であるクララ会に関しては、聖堂自体に関する研究がきわめて手薄であった。

(3) シエナのサン・フランチェスコ修道院やパドヴァのサンタントニオ修道院の参事会室に描かれた作品については、ジョットやアンブロジー・ロレンツェッティの様式を検討する上で近年もたびたび取り上げられてきたが、「宣教」や「殉教」の図像であることに特に注目し、当時の東西交流の状況や、宣教修道会であるフランシスコ会の事情を十分考慮して研究されることは少なかったといえる。日本人研究者としてイタリアだけでなく極東までを広く視野に入れることによって、美術と聖遺物との関係といった近年注目されるテーマの研究に貢献する可能性を持つものである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、フランシスコ会・クララ会修道院の絵画装飾プログラムを解読することに最終的な目標はあるが、絵画の置かれる建築にも関心を払うことにより、これまで建築史と絵画史に大きく隔たれていた研究を、有機的に結び合わせようとするものである。

(2) またナポリのサンタ・マリア・ドンナレジーナ修道院をはじめとして、以下に挙げられるような個々の修道院を取り上げてゆくが、聖堂の主要部（内陣や身廊など）以外に描かれる絵画装飾の図像プログラムを明らかにすることを主な目的とする。中でも修道院の日常生活において重要な機能を果たしていた参事会室（集会室 chapter house）と、通常は聖堂の外部に置かれていた修道女席（nuns' choir）に、特に注目する。

(3) こうした考察から派生する問題として、聖職者・修道士・修道女の信仰実践や、修道会の霊性、教会の政治的な意図、さらには大航海時代以前の宣教や殉教についての考え方などを視野に入れながら、それらと美術作品との広いかかわりについて考察することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 上に挙げたような観点からの包括的な研究が欠如しているため、ヨーロッパ中世における修道院参事会室と修道女席の建築と絵画の概観に努めるが、全般的な考察以上に個々の作例に即した調査を行う。

(2) 主にイタリアの作例を多く取り上げ、現地では写真撮影を行うなどして、視覚的な資料の収集にまず努める。その上で、各国の研究機関・図書館（フィレンツェのドイツ美術史研究所、ミュンヘンの美術史中央研究所、ナポリのフランシスコ会図書館など）および文化財関係省庁（ナポリの文化財監督局修復事務所や写真資料室など）での資料調査・収集を行う。

(3) 国外の学会に参加・発表する機会を利用して、当該分野の研究者と意見交換を行い、本研究を適切に位置付けるよう努め、またその成果を国外でも利用可能とするため、英語やイタリア語で論文にする。

## 4. 研究成果

(1) シエナのサン・フランチェスコ修道院参事会室（集会室）の壁面は、アンブロジーとピエトロのロレンツェッティ兄弟によって1330年代後半に装飾されたと考えられるが、ピエトロが『磔刑』と『キリストの復活』という参事会室に一般的な主題を表しているのに対して、アンブロジーは『トゥールーズの聖ルイと教皇ボニファティウス8世』と『フランシスコ会士の殉教』というめづらしい組み合わせの場面を描いている。

これとともに、重要な関連作例であるニュルンベルクのドイツ民族博物館にある板絵『モロッコのフランシスコ会殉教者の血の奇跡』や、ウディネのサン・フランチェスコ聖堂にあった『オドリコ・ダ・ポルデノーネ』連作場面についても調査した。

そしてシエナの作例の特に聖ルイと教皇の場面で、2人が臣従礼と同じ身ぶりを示していること、またその背後に立ち会う俗人たちの中にキリストと認められる人物が含まれていることに注目し、この場面は聖ルイの生涯におけるある出来事を表そうとするだけではなく、フランシスコ会士が教皇に従属しながらも、キリストによる後ろ盾を密かに、そして直接得ていることを描き出そうとしたものであると結論づけた。また『殉教』の場面も、具体的な事件を記録するものではなく、フランシスコ自身が殉教を望んでいたことによって示される徳を典型的に表すと

もに、殉教者の物質的な遺骸をイメージに置き換えて提示する役割を果たしていることを明らかにした。これらの解釈は、集会室の機能と絵画装飾とが密接に関連するものであることをも示しており、今後他の作例を考察する上で、重要な出発点になると考えられる。

当時のヨーロッパとアジアとの交流を考慮に入れて解釈しようとしている点、また中世末期における物質的な物（聖遺物）とイメージとの関係の変化について指摘している点に特に異議があると考えられる。

(2) シトー会やクララ会の女子修道院聖堂の修道女席には、「キリストの受難」が強調して描かれるが、それと対比的にしばしば「キリストの花嫁」としての女性・聖女を表す図像が見られることに注目して絵画図像を分析した。ドイツ騎士団領であったヘウムノの旧シトー会女子修道院聖堂では、旧約の「雅歌」と「キリスト受難伝」が連続して細長くフリーズ状に描かれ、修道女席を囲んでいる。修道女たちが自らをキリストの花嫁とみなし、キリストの贖罪と救済の業に与ろうとすることを端的に表す図像である。またこのフリーズ状の装飾形態は、造形的なイメージを黙想に利用するのにふさわしいと考えられ、同じく横長に連続するベルティーニ兄弟による「聖カタリナ伝」浮彫（ナポリ、サンタ・キアラ聖堂）も、当初は修道女の信仰実践に役立てられていた可能性を検討し、その図像を解釈した。

さらにこうした作品中で、聖女、あるいは絵画や彫刻の享受者である修道女の「キリストの花嫁」という身分が強調されているという従来の解釈に加え、ナポリのサンタ・マリア・ドンナレジーナ聖堂のフレスコを新たに解説することを通して、観想的な生と対比される活動的な生がいかに描写されているかという点に注目している。

(3) フランシスコ会の男女共住修道院であるナポリのサンタ・キアラ修道院についてはナポリの文化財監督局に残される修復記録や写真資料などを用いながら、集中的に調査を行い、「中世絵画の描き直し」というこれまであまり注目されていなかった観点から以下のような考察を行った。

祖国フィレンツェだけでなく、アッシジやローマ、パドヴァなど、イタリアの各地で制作していたジョットは、1328年から1333年にかけてアンジュー王家の支配する南イタリアの首都ナポリに滞在し、カステル・ヌオーヴォの宮廷礼拝堂や王家の創建になるサンタ・キアラ修道院の装飾などを手がけた。

しかし現在ではわずかな断片しか残されておらず、作品の様式的な特徴や図像プログラムを知る手がかりは少ない。

サンタ・キアラ修道院の場合、17世紀初頭に消されてしまった聖堂の壁画の内、脇礼拝堂の窓を囲む装飾帯とそれに縁取られるいくつかの頭部が近年発見されている。また第二次大戦で被災するまで18世紀のフレスコ画で覆われていた内陣壁面裏の広大な修道女席には『十字架降下』の一部とイリュージョンで描かれた一連の肘掛け椅子が残されている。

ヴァザーリなど16世紀の著述家は、サンタ・キアラには「旧・新約伝」と「黙示録」の場面が描かれていると記している。こうした記述をもとに、サンタ・キアラ聖堂の建築プランと絵画装飾が、終末論的なフィオーレのヨアキムの思想の図解であると考えられるキャロライン・ブルゼリウスやピエルイージ・レオーネ＝デ＝カストリスなどの研究者は、聖堂身廊の左右に並ぶ脇礼拝堂の正面と内部には「旧・新約伝」、内陣奥の壁面には「黙示録」がジョット工房によって描かれたと推測している。しかし脇礼拝堂の身廊に面する正面部分の壁面は、物語場面が描かれるには十分な広さをもってはならず、また複数の礼拝堂の装飾が連作を構成する例もあまりないだろう。

本研究では聖堂の装飾プログラムがこのようなものであった可能性を否定しないが、「旧・新約伝」「黙示録」各連作がおそらくルネサンス期までには修道院の他の場所（修道女席とその入口、また回廊の壁面）に描かれていた可能性が強いということをも指摘する。サンタ・キアラ修道院では14～15世紀に制作された絵画が、その古い構図を踏襲しながら17～18世紀に描き直されていることをいくつかの部分で確認できるのである。これらは、信仰にかかわる画像が、同じように反復される興味深い例であり、失われた作品を再構成する上で大きな手がかりともなる。中でも18世紀半ばにジェンナーロ・ピエツロなる画家により装飾された修道女席は、ジョットの描いた「新約伝」を敷き写していたと考えられる。そうした場合、ジョットの連作は元々「キリストの体＝聖体」に献じられたこの修道院にふさわしい図像プログラムであったといえる。すなわち、聖堂の祭壇の背後に設けられた修道女席から、格子を隔てて聖餐式に与る修道女たちは、ジョットの描くキリストの体、あるいはキリスト顕現のイメージと、司祭によって掲げられるホスチアを重ね合わせて見ることができたのである。ここで典礼と絵画は、神を見るところという宗教経験を、相補的に強めているといえるだろう。

(4) ナポリのサンタ・マリア・ドンナレジーナ聖堂の修道女席の「聖カタリナ伝」連作には、「神秘の結婚」の場面が欠けている。ドンナレジーナの壁画が制作されたのは、この図像の生成期に当たり、試行錯誤を示すいくつかの作例が知られている。また14世紀末には南イタリア・プリア州のガラティーナに注目される「聖カタリナ伝」連作が残されている。これらを検討することにより、ナポリの作例では特に注文主の事情を反映して、神の栄光の賛美に結びつく現世の結婚を重視した図像プログラムが考案され、同じ場所に描かれる「テューリンゲンの聖エリザベト伝」連作において、他では例を見ない「結婚」場面が生み出されたという結論を得た。

そしてこの「聖エリザベト伝」を分析することにより、観想的生活を通してのみ神に近づき得るのではなく、活動的生活／慈善の行為も終末論の文脈の中で重要な意味を持つことを明らかにした。

(5) ナポリのサンタ・マリア・ドンナレジーナ聖堂とサンタ・キアラ聖堂には、「最後の審判」「黙示録」「旧約伝」などの図像が印象的に描かれているが、中世全般におけるこうした図像を視野に入れ、また地域的にもアルプス以北の作例（スイスのケーニヒスフェルデン修道院、ドイツのヴィーンハウゼン修道院、またフランスの代表的なロマネスク・ゴシック聖堂など）についても検討することによって、「栄光のキリスト」の図像が個人の審判に重点を置いた図像に変化し、中世末の13・14世紀に向かって終末論的な意味合いを強めていった過程を考察した。その結果、この中世末期の時代が宗教的に大きな転換点にあたり、美術が個人（聖職者・修士・修道女）の信仰実践に大きな役割を果たしたことを明らかにしようとした。

具体的には初期キリスト教時代以来、聖堂・修道院の建築と美術が救いの実現のあらわれとして構想されてきたという点を引き継ぎながらも、特にナポリの作例においてはそれがフランシスコ会をめぐる特殊な思想的・政治的な状況の中で変容し、あるいは後の時代を先駆けるような個人の信仰実践を重視する側面を見ることができたと考えられる。

またこの成果を踏まえて、新しい研究の分野といえるが、「聖霊」と「終末論」との結び付きについて検討し、それと美術とのかかわりについて、さらにフランシスコ会のなかでの厳格派、いわゆるスピリトゥアーリ（聖霊派）にまつわる図像の調査を始めている。

なお本研究の成果は、“Tra il gotico e l’antico - Alcune considerazioni sulla

pittura della prima metà del Trecento a Napoli,” Renaissance Médiévales: conference at Internation Research Center for Late Antiquity and Middle Ages, Motovun, Croatia, 30/05/2009などで、今後も引き続き発表される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

① Hisashi Yakou, “Memory without Mementos: Franciscan Missions and Ambrogio Lorenzetti’s Frescoes in Siena”, *The Annual Report on Cultural Science* (北海道大学文学研究科紀要), 119, 2006, pp.1~17. (査読なし)

[学会発表] (計 2件)

① Hisashi Yakou, “Contemplazione e azione - Qualche osservazione sulla pittura in ambito francescano al tempo di San Corrado Confalonieri”, 5° Convegno Internazionale di Studi in onore di San Corrado Confalonieri (第5回聖コッラード・コンファロニエーリ国際研究学会), Piacenza (イタリア, ピアチェンツァ), 2007年6月9日.

② 谷古宇尚「中世絵画の描き直し—ナポリ, サンタ・キアラ修道院壁画装飾について」第58回美学会全国大会, 札幌(北海道大学), 平成19年10月6日

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

谷古宇 尚 (YAKOU HISASHI)  
北海道大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号: 60322872

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし